

性の多様性は全人類の一人一人が 違うグラデーションになっている

外資系IT企業勤務
中川 真太郎さん



性的指向についての悩み

ずっと悩んでいました。一番悩んでいた時期は学生時代。性の多様性に関する知識がなかったので、自分の変なんじゃないか、この気持ちは正しいのか、人生のフェーズの一つなのかと色々悩みました。将来結婚して幸せな家庭を築くのが当たり前だと思っている、ということは女性と結婚することになる。それって何なんだろうという悩みはずっとありました。

親へのカミングアウト

自分からカミングアウトをしたというより、ばれたという感じでした。当時アメリカ人の彼がいて、私の実家に遊びに来てプチホームステイをしていた時に、親は英語が分からないと言いつつも、毎日私たちの様子を見ていて気が付いたのか、「本当に2人仲がいいよね、付き合っているんじゃないの」と冗談めかして言うてきたんです。隠していたわけではないけど、このタイミングしかないかなと思って「そうだよ」と言ったら、「やっぱり、そうだと思うんだよね」と。冗談っぽく、まるくおさめてくれました。

うちの親がオープンマインドというわけではなく、古い考えも持っている普通の両親だと思います。親にカミングアウトをしようと思えたのは、親の日常を見ていて、自分に対してだけでなく、他の人に対しても、物事や出来事に対しても、これはこうあるべき、こうしなければ許さないというタイプの両親ではなかった

ので、そういうことの積み重ねだと思えます。留学に行く時も、その道に進んで食べていけるのかという昔ながらの考え方もあったけど、認めてくれていたので、最初の反応はどうであれ最終的には認めてくれていたというのが安心感につながっていたと思います。カミングアウトしないことのストレスというのは何年も何十年も抱えていくもので、親が受け入れてくれるという安心感は大きいと思います。

親との会話の中で、英語圏だとsexualという言葉で、どんな状態でも愛してるよということを言ったりするんですけど、日本だと子どもに対して愛してるよと言うことはあまりないと思うので、「いいんじゃない」と、さっさと当たり前のように受け止めてくれたのが嬉しかったというかほっとした言葉でした。

社会生活での気づき

日本では、まだ性の多様性に関する知識が広まっていないという現状があるので、周知を広めていくことや理解を深めていく何かがあるといいなと思います。様々な性的指向の人が身近に居るという認識や言葉遣い、行政でも民間でも利用できるサービスが増えていくといいのかなと思います。

読者へのメッセージ

一番知っていて欲しいのは、LGBTQについていう枠組みもアルファベットが数

えきれなくらいあるし、何かのアルファベットに当てはまるということではなくて、全人類の一人一人が違う、グラデーションになっているというのが背景にあるので、何かに当てはめようとはせず、自分の好きな物は好き、嫌いなものは嫌いというのを、知見を持った周りの大人に相談できて、大人がそれでいいんだよと言ってあげられることが大切だと思います。

身近にできることは、LGBTQに関わらず、男性女性の役割を決めつけないということ。今の社会全体として、男性だから女性だからという概念自体について気を付けていけばLGBTQの人にとってもセンシティブな言い方にはならないと思うので、一人の人間として見るということが社会全体で広まればいいと思います。





病気になったときに誰かが隣にいてくれることが大事で隣にいる人は男でも女でも誰でもいいんだよ

NPO 法人 ASTA 共同代表
松岡 成子さん

一般社団法人 fair 代表理事
松岡 宗嗣さん

親へのカミングアウト

宗嗣さん：親にカミングアウトしたのは大学生の時。母（成子さん）と姉と一緒にご飯を食べている時に、母が「彼女いるの」と聞いてきて、いつも通りかわっていたら、「じゃ彼氏いるの」と聞かれました。びっくりして冷や汗が出たのですが、母の日頃の言動などから、9割は言っても大丈夫だろうという期待と、1割の不安を抱えつつ、そろそろ言ってもいいのかなと思って伝えました。

成子さん：カミングアウトを受けて初めに思ったことは、やっと言ってくれたということでした。同性愛者だと聞いた時に、「どうしてお化粧しないの」と聞いてしまったんです。「それはステレオタイプだね、LGBTQって聞いたことある?」「何それ?」という会話だったくらい、性の多様性について全く分かっていませんでした。カミングアウトを受けて、肩の荷が下りたというか、子どもにとっては大きな足かせみたいな秘密が目の前で解消されたことの喜びが大きかったです。

宗嗣さん：自分の性的指向は、家族にとってネガティブな側面が大きいのではないかと思います。普通と言われるような性のあり方に沿えないことへの罪悪感みたいなものがあつたので、やっと言ってくれたという反応は嬉しかったです。母が、「宗嗣が病気になったときに誰かが隣にいてくれることが大事で、隣にいる人は男でも女でも誰でもいいんだよ」と言ってくれたのは、本当に嬉しかったですし、相当ほっとした言葉でした。

会話のキャッチボール

成子さん：公園デビューの時から、いわゆる男の子らしい遊びはせずにお花にこまめな挨拶をするようなタイプでした。でも、この子がそれが好きで選んでいるならそれでいいし、男の子なんだから、塗り絵とかじゃなくて、野球をしないといつていう誘導の仕方だけはなぜか本能的にしませんでした。

日々の生活の中で、様々な差別に関する報道などに触れたら、その都度何が良くないのか子どもと話していました。個性が面白いということもあるけど、そこで人を判断するものではないと子どもたちに伝えていたので、カミングアウトしても拒絶されないという漠然とした自信は持っていたみたいです。宗嗣が小学校6年生の時に、テレビに出ているタレントを見て、「俺がオカマになったらどうする?」って聞かれたことがあって、「幸せならそれでいいんじゃない」と答えました。普段から会話のキャッチボールはしていて、育てていく中でヒントがいっぱいあつたかなと思います。

無自覚の差別をなくすために

なくすために

宗嗣さん：まずは自分には偏見があるという前提に立つことからだと思います。カミングアウトするとポジティブな意味で、私は理解があるよとか、全然そういう人に偏見ないと言う人がいます。その気持ち自体はもちろんうれしいのですが

けど、偏見がない人はいないので、偏見があるという前提にすべての人が立つことが大切だと思います。そうすると自分の言動や考え、普通とか当たり前とされる「規範」をあえて疑ってみるという作業が発生してくる。その作業が必要かなと思います。

私が大事にしたいなと思っているのは、一対一の人間関係において、性のあり方はあくまでもその人を構成する要素の一つということ。ただ一方で、LGBTQなどをグループとして捉えた時は、特有の困り事があるという点は、誰もが知っておくべきことだと思います。なぜかという『生まれた時に割り当てられた性別と性自認が一致していない、異性愛者である』ことを前提に、長い歴史の中で制度や社会的な文化が作られてきていて、そこから排除されているのは事実なので、その部分を理解したうえで、一対一の関係性においてはフラットに見て、ゲイの松岡さんじゃなくて、松岡さんであり、ゲイの当事者でもあるというスタンスに立つというのが大事ではないかと思っています。

性的マイノリティに対する理解が難しいと感じることについて

成子さん：理解できないというのは幾つかの側面があると思うんですけど、一つは自分自身が持っている価値感や、常識という自分の感覚で、例えば将来孫の顔が見たいなどの願望の強い弱いがあって

つらい状況にある時は 逃げてもいい、まずは 自分を大事にして欲しい

そういうのが強い人は自分の中で理解できないというか、飲み込めないところがあると思うんです。もう一つの理由は、社会的な影響だと思っています。例えば、おじいちゃんおばあちゃんが知ったらなんて言うかなとか、隣近所の人とのつき合いがとても強い場合、今度のお祭りには恥ずかしくて行けないとか、社会的な影響で、自分が追いやられたり自分の子どもが傷つけられるということに対しての抵抗かなと思います。社会的な抵抗感を減らせば、おのずと親もポジティブになるかなとは思っています。

性自認や性的指向について 悩んでいる人へのメッセージ

宗嗣さん：もし今悩んでいて、それが自分のせいなんじゃないかとか自分はおかしいんじゃないかと思っているとしたら、まずは、あなたはおかしくないし、あなたのせいでもないよと伝えたいです。今悩んでいる当事者からすると自分らしく生きてもいいんだよと言われてもなかなかそうできないことへの葛藤もある時に、自分らしく生きられないのは社会のせいだということを受け止めると、少し心が軽くなるかなと。それと同時に相談できる人に出会って欲しいと思います。

身近な関係の中での規範の押し付けや、友達関係の中で隠さなければいけないなど、つらい状況にある時には、逃げてもいいんだよと伝えたいです。必ず家族に話さないといけないというわけではなくて、まずは自分が安全に生きていくということが大切です。どうしても家族には知っておいて欲しい、自分らしく生きていたいと思うことはもちろん大切だと思うので、カミングアウトをしたり知識の啓発をすることは大切だと思うんですけど、まずはやっぱり自分を大事にして欲しいと伝えたいです。

親世代に 伝えたいこと

成子さん：NPO法人ASTAを立上げて、小学校高学年から大学生の方たちに

向かったの授業や、教職員やPTAに対する研修などを行っています。

ASTAの中にいる保護者のメンバーで、活動前からLGBTQのことを知っていた人は誰一人いませんでした。私も当事者の人はなぜ悩んでいるのか、なぜ問題になるのか、なぜ死を選ぶぐらいのことになるのかも理解できないという無理難題だったんです。そこをちゃんと教えてもらっていたら、子どもからカミングアウトを受けて気持ち悪いか、家から出て行けとか言わないと思うんですよ。子どもたちが苦しくなって先生や親にカミングアウトしてから困りごとへの対応をするのではなくて、子どもが苦しむ前にどうすればいいかということを考えなくてはいけないと思います。自分の子どもが当事者かもしれないし、そうではないかもしれない。でも友達の中に当たり前にいます。その友達に対して、あなた



の子どもは守る子になるのか、いじめる子、面倒くさくて距離を置く子になるか大人の影響は大きいと思うんです。性的指向の事に関しては子どもが初恋を迎える前に、「異性を好きになるかもしれないけど同性を好きになってもいいし、恋愛しない人もいるんだよ、もし悩んだなら教えてね」という一言を、親が言えるかどうかが大切だと思います。

当事者ではない人が、LGBTQの人を支援するように、当事者同士でもアライになれると思うんです。誰もが誰かのアライになれるんですよ。子どもたちには信頼する大人に、悩み尽くす前に相談して欲しい。親がちゃんと準備していたら、今だけの感情だとか、そんなこと人前で言うことじゃないとか言うことが減っていく。そうすれば当事者の子どもも、もう少し気持ちが楽になるんじゃないかなと思っています。